



エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究

研究分担者：安尾 有加（国立病院機構神戸医療センター看護部）
 研究協力者：廣田 和之（国立病院機構大阪医療センター感染症内科）
 矢倉 裕輝（国立病院機構大阪医療センター薬剤部）
 安尾 利彦（国立病院機構大阪医療センター臨床心理室）
 安田 一貴（国立病院機構神戸医療センター看護部）
 矢部 育子（国立病院機構神戸医療センター地域連携室）

研究要旨

HIV 感染症は抗ウイルス療法の継続によって医学的にコントロール可能な疾患となり、患者の生命予後も極めて改善した。一方で、長期生存者における慢性期の合併症が課題となっている。それは、骨代謝性疾患や生活習慣病、悪性疾患、CKD など HIV や ART に関連して併発する疾患や HIV 感染症に関連しない疾患への罹患、それらに伴うケアの必要性である。いずれの場合も、エイズ診療拠点病院のみで完結する医療・看護では不十分であり、他疾患と同様の連携、看護の提供が必要となっている。そこで、平成 21 年度から実施している訪問看護師を対象とした研修会を継続的に開催することで、知識の習得の機会を設け、HIV 陽性者の受け入れのための準備性を向上させたい。研修会については、平成 27 年度に実施した全国調査結果から、HIV 陽性者の受け入れが困難とされる地域での開催を企画した。また、長期療養型病床を有する施設で勤務する看護職員、保健師を対象とした研修会も実施。受講者を増やすために HIV 感染症に特化した研修会ではなく、施設で問題となりうる感染症の講義とタイアップした内容で研修会を企画した。

また、今年度は、「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」という訪問看護師向けのパンフレットを改訂した。

研究目的

訪問看護を主とする在宅支援提供者が HIV 感染症患者を受け入れる上で直面する課題である職員の知識不足、不安に対して直接的な介入を行い、その評価を行う。

研究方法

- 1) 平成 27 年度の全国調査で HIV 陽性者の受け入れが困難という回答が多かった、もしくは、受け入れが可能という回答のなかった地域で研修会を企画。
- 2) 大阪府下の長期療養型病床を有する施設で勤務する看護職員、保健師を対象とした感染症研修会を開催。
- 3) 訪問看護師を対象としたパンフレット「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」の改訂。

研究結果

1) 訪問看護師研修会

(1) 研修の実施および参加状況

平成 31 年 1 月 26 日(土)の午後に高知市内で開催を企画。平成 30 年 10 月末に対象となる県内の訪問看護ステーション、保健所、中核拠点、拠点病院へ研修案内を郵送。12 月末の時点で申し込み者が 1 名のため中止とした。

2) 感染症研修会

(1) 研修の実施および参加状況

12 月 8 日(土)大阪市北区にて開催。申込者 31 名、参加者 26 名であった。

(2) 研修プログラム

プログラムは、B 型肝炎、ノロウイルス感染症の基礎知識、HIV 感染症の基礎知識と陽性者支援、施設における標準予防策の実施についてという内容で

実施。全体で約4時間の研修であった。長期療養型施設で対応が課題となりうる感染症をタイアップすることで、参加者の増加を図った。

(3) 研修終了後のアンケート結果

参加者の背景は、保健師が最も多く、次いで長期療養型病床を有する施設に勤務する看護師であった(図1)。アンケートの回収は26名。過去に31%の人が研修を受講、過去にHIV陽性者の受け入れ経験があるのは31%であった(図2)。

各講義に対する理解については、B型肝炎の基礎知識の理解が他の講義と比して低下してはいるもの

の、概ねどの講義も理解できた、やや理解できたが90%以上を占めていた(図3~6)。

研修会に参加してHIV陽性者の受け入れ意識に変化したと回答したのは62%、以前から支援したいと考えており、変化していないと回答したのは19%であった。変化していない、もしくは以前から支援は困難と考えており変化していないという回答は0%であった(図7)。今後、HIV陽性者の受け入れについては38%が受け入れ可能、58%が準備が整えば可能と回答し、受け入れ不可能という回答は4%であった(図8)。参加者の92%が継続的な研修会の開催を希望していた。

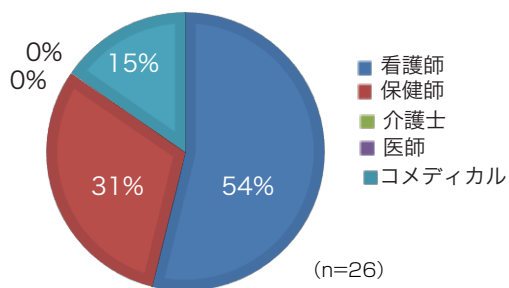


図1 参加者の職種

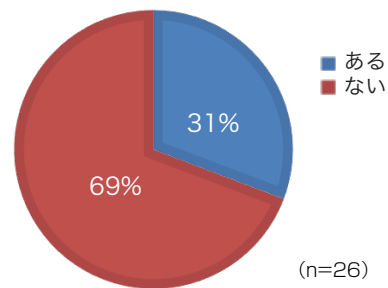


図2 HIV陽性者支援の経験

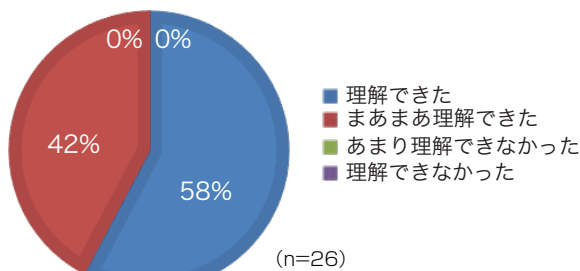


図3 B型肝炎の基礎知識

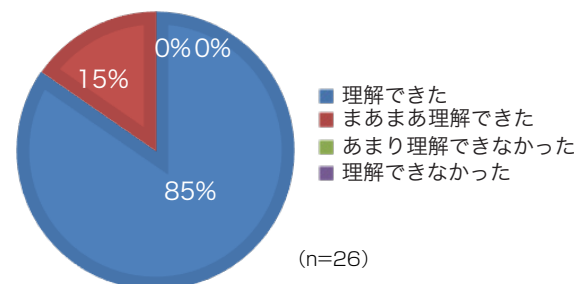


図4 ノロウイルス感染症の基礎知識

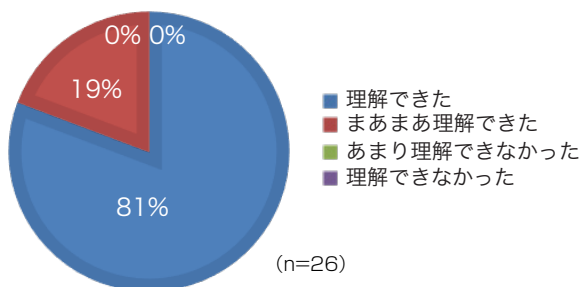


図5 HIV/AIDSの基礎知識と陽性者支援

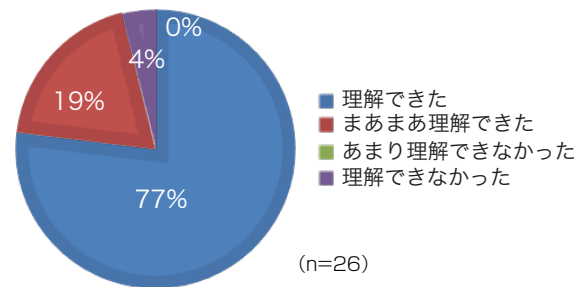


図6 施設における標準予防策の実施

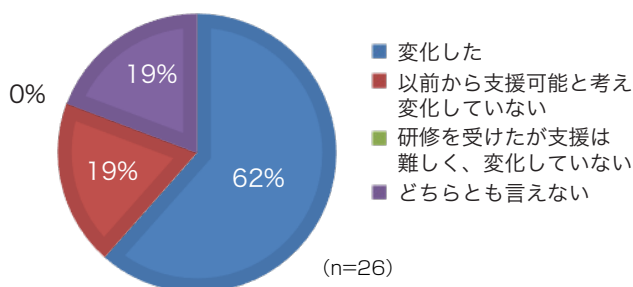


図7 研修前後の意識変化

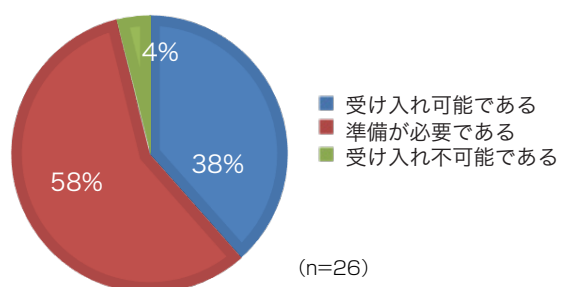


図8 HIV陽性者の受け入れについて

（４）研修全体を通しての意見

- ・ 過去に回復リハ病棟への転院を希望された HIV 陽性患者さんをお断りしたことがある。感染対策委員会で検討したが誰も判断ができず、受け入れの体制ができていないということでお断りとなった。その後、HIV 陽性者受け入れについて、一度も検討されていない。いつ自分の病院に HIV 陽性患者が来ても不思議ではない時代となっているので、病院として受け入れを前向きに検討してほしい。
- ・ HIV 陽性者の受け入れ等で、スタッフ教育でも理解が得られにくい。医師も消極的。まず医師から考えを改めないといけないのではと思う。
- ・ ノロウイルスや標準予防策について、基本を聞く機会がこれまでなかったため、とても勉強になった。
- ・ 今後、受け入れを考えているため、院内の職員を対象に HIV 感染症の研修会をしにきて欲しい（2 施設）

備性の向上につながった。

健康危険状況

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

論文発表

該当なし

学会発表

該当なし

3) 「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」の改訂。

薬剤情報や社会制度に関することについてアップデートし、全般的な改訂を実施。

考察

1) 訪問看護師研修会

受け入れが困難と回答の多かった地域を選択しているうえ、中核拠点病院主催で、介護士、訪問看護師など在宅で支援する職種を対象とした研修会が1月上旬に開催予定であったことで、申込者が極端に少ない結果となった。今後は、開催日程、方法、協力施設など地域によっては地元のスタッフと相談しながら企画、実施をしていく。

2) 感染症研修会

HIV 感染症以外の疾患や現場に則した予防策を講義に取り入れることで、受講者の興味、関心につながったと考える。個別での研修会希望の申し出もあり、出張研修も検討。また、次年度は大阪以外の地域での研修会を検討していく。

結論

- ・ 研修会への参加によって、受け入れに向けた準